第４学年　道徳科学習指導案

日 時　令和３年９月 22 日（水）第５校時
第 4 学 年 1 組　25 名（男子 13 名　女子 12 名）
授業者　杉浦　利奈

自己を見つめ、よりよく生きようとする児童の育成
～道徳科の授業改善を通して～

１　主題名　友達を信じる　　Ｂ［友情，信頼］

２　教材名　「大きな絵はがき」　（新訂　新しいどうとく４　東京書籍）

３　主題設定の理由（授業者の指導観）

⑴ ねらいとする道徳的価値について

「特別の教科　道徳」における内容

Ｂ　人との関わりに関すること １０［友情，信頼］ 〔第３学年及び第４学年〕 友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。

友達との間に信頼と切磋琢磨の精神をもつことに関する内容項目である。

友達は、家族以外で深い関わりをもつ大切な存在であり、共に学んだり遊んだりすることを通して、互いに影響しあって築かれるものである。同世代で、自分のことを親身になって励ましてくれたり、支えてくれたりする人こそが友達である。逆に、友達が困っていたり、悩んでいたりするときに、親身になって助けたり寄り添ったり、友達が頑張っているときに励ましたり、何かを達成したときに称えたり、そしてそれを、自分のことのように、ときにはそれ以上に心から喜ぶことができるのが友達である。このようにして、日々の生活の中での嬉しいことや楽しいこと、悔しいことや辛いことを分かち合うことで、心の繋がりが育まれていく。学校生活において、友達は、自分自身を素直に表現でき、心から安心した生活を送っていくためにかけがえのない存在なのである。

このようなよりよい友達関係の構築のためには、様々な場面を通して、理解し合い、互いに認め合い、協力し、助け合いながら、時を共にしていくことが大切である。そうして、児童は信頼感や友情を育んでいくのである。そこには、友達に対してのゆるぎない信頼があり、それを支えているものは、友達のことを心から信じることのできる強い思いである。

そこで、道徳科の学習を通して、かけがえのない友達のことを心から思い信頼し、助け合うことの大切さやよさについて考えさせたい。

⑵ 児童の実態

本学級の児童は、互いをよく理解し、よさを認め合い協力しながら様々な活動に取り組んでいる。係活動では、互いの得意なことを生かした活動内容を提案したり、共に声を掛け合いながら役割分担したりして活動を進めている姿が見られる。また、気の合う者同士で仲間を作って自分たちの世界を楽しもうとするなど、集団での活動が活発になっている。その中で、大切な親友も現れ始めている。彼らは常に一緒に行動し、共通の対話を楽しみ、ときに切磋琢磨しながら互いを認め合っているように思われる。

しかし、それらの行動や言動は、「仲が良い」「すき」といった感情によるもので、それらはまだ信頼や友達を信じるといった心情に深く根差していないと考えられる。

そこで本時では、友達を信じるからこそできることや言えることがあるということに気付かせたい。誰かのためにしたことや、誰かがしてくれたことは、信頼がもとになっていることを考える学習を通して、心から信頼し合う関係を作り、友達を信頼し、仲良く助け合っていってほしいと願っている。

本価値に関する指導は、別葉で見るように、各教科等の指導内容で扱うの機会は少ない。以上のような児童の実態から、本時では、道徳教育を「補う」視点を意図して授業を行う。

⑶ 教材について

本教材は、1980 年に発行された「小学校道徳の指導資料とその利用３　中学年（文部省）」の資料「絵葉書と切手」に基づいて教科書に編集されたものである。長年受け継がれてきた優れた道徳の教材であるといえる。

主人公の広子は、転校した正子から大きな絵はがきをもらう。そこには、蓼科高原のきれいな景色が描かれていた。しかし、普通より大きなはがきだったために、不足料金を支払うことになった。そのことに対して兄は、「友だちなら教えてあげるべきだ。」と言い、母に相談すると、「お礼だけ言っておいたほうがいい。」と言う。二人の相反する意見を聞き、迷った広子は「正子さんは、他の友達にも同じようにするかもしれない。」と、返事に料金不足だったことを書くことを決める。苦言を言うことで嫌われるのではという不安よりも、二人の信頼関係のもとにあえて伝えることを選ぶ。友達である正子のことを信頼し「きっとわかってくれる。」と考えた。

本教材は、児童が広子の心の葛藤を自己に投影して考えることのできる教材である。そのことを通して、友達を信じ、思い合うことの意味をより深く理解して、自己を見つめることができると考えた。

そこで本時では、広子の心の葛藤に焦点を当てながら、児童が自己を広子に投影し、友情についての考えを深め、心から友達のことを信じ、友達のために尽くそうとする心を育てていきたい。

教材分析表

場面の概要（頁.行）	広子の内面	関連価値	発問例
（Ｐ123）Ｌ1～L10	・誰からだろう。	Ｂ友情	

①郵便が届いたとき	・料金不足だと受取る人が払うことになるんだ。		
L 11～(P 124)L 4 ② 兄から絵はがきを受け取ったとき	・正子さんからだ。 ・久しぶりだ。元気かな。 ・大きくてきれいな絵葉書だな。 ・私も行ってみたいな。 ・転校してからもくれるなんてうれしい。 ・早く返事を書きたいな。 ・お金のことは知らなかったな。	B 友情 B 思いやり A 誠実	
L 5～L10 ③ 絵はがきを読んだとき	・一緒に高原へ行きたい。 ・こんなにきれいな景色だから、大きな絵葉書で伝えたいと思ったんだ。 ・でも、普通のはがきと同じように考えて切手を貼ったんだな。	B 友情 A 誠実 D 感動	
L 11～L15 ④ 返事を書こうとしたとき	・なんて書こうかな。 ・この、うれしい気持ちを早く伝えたいな。 ・でも、さっきの料金不足のことが気になるな。 ・伝えた方がいいのかな。 ・でも、せっかくの手紙にそんなこと書きたくない。いやな気持ちにさせてしまうかもしれない。	B 思いやり A 正直，誠実	
L 16～(P 125)L 1 ⑤ 母に相談したとき	・やっぱりそうだよね。 ・お母さんがそう言ってくれてよかった。 ・お礼だけにしよう。	B 思いやり B 礼儀	
L 1～L 3 ⑥ 兄の意見を聞いたとき	・そうなのかな。 ・でも、それでいやな思いしないかな。 ・嫌われたらいやだな。 ・どうしたらいいだろう。	B 思いやり B 礼儀 A 正直，誠実	

L４～L8 ⑦ 二人の意見を聞いて迷い、一人で考えていたとき	・困ったな。どちらにするべきか迷うな。 ・お母さんの言うように、お礼だけすれば嫌な気持ちにさせなくてすむ。 ・でも、お兄ちゃんの言うように、友達なら教えてあげた方がいいのかな。	B友情 B思いやり B礼儀 A正直，誠実	母と兄の二人の考えを聞いて、広子は一人でどのようなことを考えたでしょう
L９～L13 ⑧ 自分の考えを決めて返事を書き始めたとき	・他の友達にも同じように送るかも。 ・そしたら、また相手に、足りないと思われてしまう。それは私も嫌だ。 ・せっかく送るのに、相手に嫌な思いをされてはかわいそう。助けたい。 ・大切な正子さんのため。 ・正子さんならわかってくれる。 ・信じている友達だからこそ伝えよう。	B友情，信頼 B思いやり B礼儀 A正直，誠実	① 広子はどのようなことを思って料金不足を伝えようと決めたのでしょう。（中心発問）

４　ＥＳＤとの関連

〈他者と協働する態度〉

他者と協働して話し合い活動に重点を置いて取り組んでいく。そのためにはまず、本時において、児童一人一人が自分の考えをもつことが大切である。導入では、友達とのかかわりについて想起し、展開前段では、登場人物に自我関与して考えられるようにする。後段では、本教材を通して自己を投影しながら振り返ることができるようにする。その上で他者の話を聞いて、共感したり新たな考えを知ったりして交流することによって、よりよい考えを導き出していくことができる。自己内対話をしたうえで他者理解を深めることで道徳的価値の理解を深め、児童一人一人が自分の考えを確立させることに繋げていきたい。

５　研究主題と関連した本時の工夫

⑴ 教材提示の工夫

読み聞かせでは、効果的な間を取って読むことで、児童が教材の世界に浸ることができるようにする。さらに、ＢＧＭを活用して、より臨場感を醸し出すことで、児童が教材の物語の世界に浸り、登場人物に自我関与することができるようにする。読み聞かせた後は余韻を保ち、児童の教材についての思いを深めさせ、児童が教材に自己を投影して考えられるようにする。【工夫①】

また、定形外の絵葉書を見たことのない児童のため、また、友達がこんなに素敵な絵葉書を送ってくれたということを捉えさせるために、実物大の絵葉書を提示して視覚で捉えさえる。そして、普通葉書も見せ、絵葉書の大きさが料金不足となることを視覚で捉えさせる。【工夫②】

このように、児童が教材の世界に浸ることで登場人物に自我関与でき、一人一人が自分のこととして考えることができる。教材は児童の心を映す鏡である。児童の心の内面を言葉にして表出することで、協働的な話合い活動が生まれることから、教材提示に力を入れたい。

⑵ 話合い活動の工夫

友達のことを信じて、友達の正子へ料金不足を伝えようとする思いを深く考えさせる（中心発問）ために、基本発問にて兄の考えと母の考えを聞き、考えを張り巡らせる場面を取り上げ、考えを広げていくためにペアでの話合いを行う。

ペア学習では、「二人の意見を聞いて、広子は一人でどのようなことを考えたでしょう。」と発問してからペアになり、兄の考えに賛同する立場と、母の考えに賛同する立場に分かれて話合う。まず、教師の始めの合図で兄の考え側の児童に、「ちゃんと言ってあげた方がいいよ。」と発言させてから、母の考え側の児童が「でもね」と考えを伝え、今度は、兄の考え側の児童が「でもね」と考えを伝えるというように、交互に考えを伝え合っていく。教師の終了の合図で、今度は役割交代をして同様に伝え合っていく。

この行為によって、他者理解を伴いながら、友達に対しての心からの思いを広げさせていく。その際、教師は児童の話合い活動の様子をうなずきながら聞き回り、児童の発言をメモして板書にまとめていく。【工夫③】

双方が兄の考え側を演じ考えることによって、友達を信じているから料金不足を伝えようという強い思いが生まれ、中心発問でより深く考えられるのではないかと考えた。

⑶ 板書の工夫

広子が迷っている場面絵が教科書に掲載されていないため、新たに場面絵を製作し、黒板の中央に掲示することで、視覚からも児童の思考を促したい。

広子が迷っている場面絵の左右に、兄の考えと母の考えを分けて板書する。さらに、中心発問は、黒板の上段部に横書きで板書することで、本時のねらいを際立たせて明確にし、自己への振り返りに繋げたい。【工夫④】

6　本時の指導

⑴ ねらい

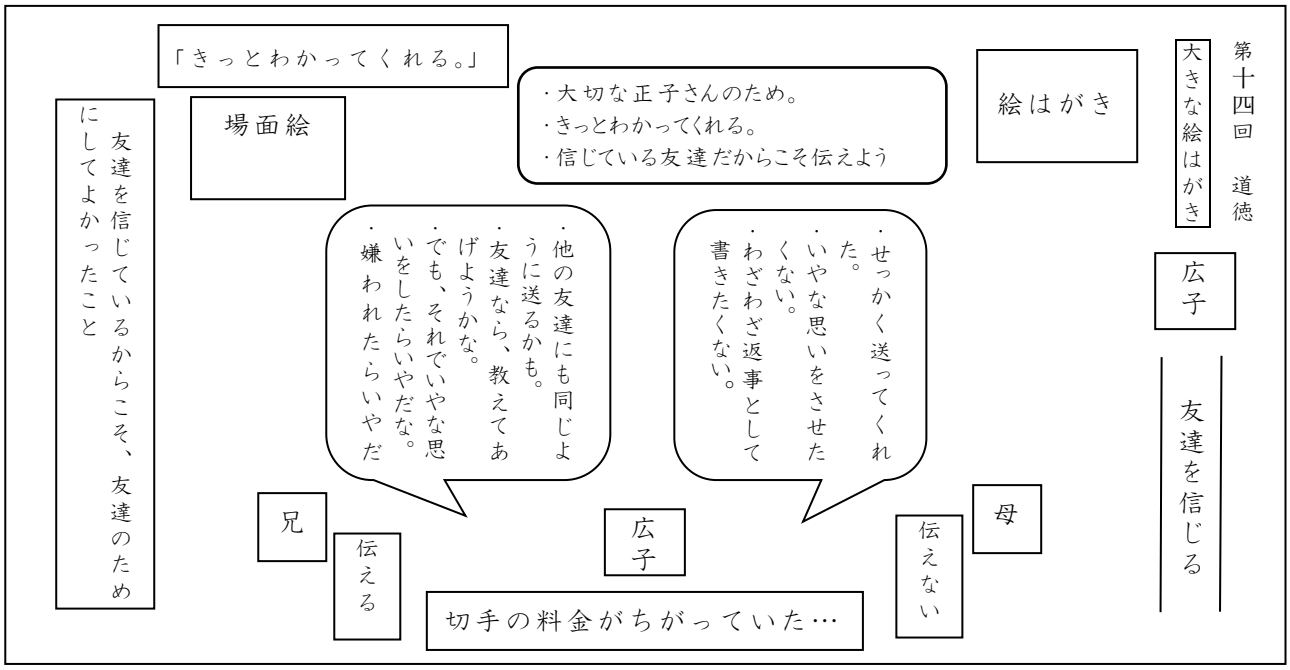
友達の正子のためを思い、絵はがきの料金不足を伝えようと決めた広子の考えを理解する学習を通して、友達を信頼し、助け合いながら友情を深めていこうとする心情を育てる。

⑵ 学習指導過程

	○主な発問　・児童の心の動き	○指導上の留意点　☆評価
導入	1　これまでの友達とのかかわりについて考える。 ○ 目を閉じて大切な友達のことを思い浮かべてみてください。	○自分にとって大切な友達のことを想起させることで、本時の学習を自分事として捉えて考えられるようにする。 ○主題名を貼り、友達を信じることについて考えていくことを伝える。
展開（前段）	2　教材「大きな絵はがき」を読んで話合う。 ①　母と兄の二人の考えを聞いて、広子は一人でどのようなことを考えたでしょう 〈お礼だけ言えばいい〉(母の考え) ・せっかく送ってくれたのだからお礼だけにしよう。 ・わざわざ返事として書きたくない。 ・受け取ったら嫌な思いをするかも。 ・お礼だけにすれば嫌な気持ちにさせなくてすむ。 〈教えた方がいい〉(兄の考え) ・友達なら、教えてあげた方がいいのかな。 ・他の人にも同じように送ったら迷惑をかけるかも。 ・知らないと恥をかかせてしまう。 ・教えてあげた方が助かるかな。	○教材名を貼り、主人公の絵を見せて紹介し、広子の気持ちを考えていくことを伝えてから読み聞かせをする。 ○ＢＧＭを用いて臨場感を醸し出し、読み聞かせ後は余韻を保つ。【工夫①】 ○実寸大の葉書と大きな絵葉書を提示して、児童が主人公の早く返事を書きたい思いに共感できるようにする。【工夫②】 ○発問後、考える時間を十分に取る。 ○兄と母の考えを聞いて葛藤する広子の内面を、役割演技を通して考えさせる。 ○〈お礼だけ言えばいい〉と考える役と、〈教えた方がいい〉と考える役に分かれて、ペアで役割演技をする。 ○支援が必要な児童は 3 人グループにする。 ○「始め」の合図で、〈教えた方がいい〉と考える役の児童から発言する。それに対して〈お礼だけ言えばいい〉と考える役の児童が反論し、それを交互に「終了」の合図があるまで続ける。その後、役割交代をしてもう一度行う。（フェイスシールドを着用させる。）【工夫③】 ○児童の発言をメモし、集約してから葛藤する広子の気持ちを２つに整理分類し、左右に分けて板書する。【工夫④】

	② 「きっと、わかってくれる。」広子はどのような思いで料金不足を伝える返事を書き始めたでしょう。 ・他の友達にも同じように送るかも。 ・また足りないと思われてはいやだ。 ・せっかく送るのにいやな思いをされてはかわいそうだ。助けたい。 ・大切な正子さんのため。 ・正子さんならわかってくれる。 ・信じている友達だからこそ伝えよう。	○発問後、考える時間を十分にとる。 ○児童の発言をメモし、集約してから中央部に板書する。【工夫④】 ○必要に応じて、「正子さんが嫌な思いをするかもしれないよ。」と投げかけ信頼している友達だからこそ、助言することに決めた広子の心情を考えさせる。 ☆広子が、正子を信頼し、助言することに決めたときの考えを類推することを通して、友情，信頼についての道徳的価値の自覚を深めている学習状況を把握する。 （発言：板書・座席表）
展開（後段）	3　これまでの自分の生活を振り返る。 ○　友達のことを信じているからこそ友達のためにしたことには、どのようなことがありますか。自分自身の生活を振り返って考えてみましょう。 ・倉庫の上にボールを乗せてしまったことを隠そうとした友達を助けたいと思い、一緒に先生に言いに行った。 ・友達がきちんと言えてよかったと思った。	○主題名を意識したつなぎの言葉を話してから発問する。 ○ワークシートに記述させる時間を充分に取る。 ○考えが思い浮かばない児童には、「してもらった経験でもよい」ことを伝え、一緒に考え助言する。 ○発表することを了承した児童のみを指名する。 ☆友達を信じ、自分の思いを友達に伝えたり、行動したりしたことについて自分を振り返っている学習状況を把握する。(ワークシート：記述)
終末	4　教師の説話を聞く。 ○　学校に行かなくなった私に「そろそろ来た方がいいよ。」と助言してくれた友達がいかに私のことを思ってくれていたかを心から考え大切に思った話。	○身近な人の体験を聞くことによって、本時の道徳的価値を深め、明日につなげていこうとする心を育ませる。 ○余韻を残して終える。

⑶ 板書計画



＜授業観察の視点＞

① 児童が教材に浸り、自我関与できるような教材提示になっていたか。

② ペア学習による話合い活動は、考えを広げさせるために効果的であったか。

良い姿勢で読み
登場人物の気持ちを
じっくり考えています。

「どうしよう」かと迷う
主人公になりきって
話合い活動をしています。

発表している人に身体を向け
友達の考えに、真剣に
耳をかたむけています。